

第16回 ちゅうでん教育振興助成（平成28年度）

報告書資料 一般-46

学校名・団体名	静岡市立城北小学校
HPアドレス	http://www.iyouhoku-e.shizuoka.ednet.jp/
コース	学校支援
活動・研究 テーマ	これからの支援ニーズに応える特別支援教育の推進～通常学級の経営を基盤としたインクルーシブ教育システム実現の可能性追求～
<p>〈活動・研究の意義、目的〉</p> <p>インクルーシブ教育システムとは、障害のある子も無い子も共に学び合う共生社会の実現である。誰もが、生まれ育った地域の学校に無理なく通えるシステムの実現が望まれている。ところが、本校は、開校以来特別支援学級が無く、地域の児童は、より手厚い支援を求め学区外の特別支援学級設置校へと通学するのが慣例であった。そのため、校内では、支援環境（人的、物理的）と具体策の蓄積が乏しく、通常学級で増加する支援ニーズへの対応の遅れが、喫緊の課題となっていた。</p> <p>そこで、日々成長する児童と向き合い、発達を支える手立てを“まず”開始することと、担任はもとより、教育に関わる職員をはじめ事務職員・用務員等全職員・全学校での専門性の向上を図るため、本研究を開始した。</p>	

1 研究推進の主な方策

- 教育相談的手法によるきめ細やかな児童・保護者の支援ニーズの把握と支援計画の作成を行う。
- 前年度までの支援策をさらに発展させ、インクルーシブ教育システムの構築を念頭に、合理的配慮、スクールクラスター整備の具体策を追求する。
- 授業・教室のICTによる支援・授業のユニバーサルデザイン化、および視覚支援環境の充実等環境整備の具体策研究を推進する。
- 課題克服のための職員の専門性向上研修を行う。

2 研究経過と4つのステージの関連・段階的な指導の具体。

	取り組みの具体策
第1ステージ: 「種をまこう」 4・5月	<ul style="list-style-type: none"> ○支援の必要な児童(車いす使用児童を含む)の支援環境を整備。 (研修の場での授業のユニバーサルデザイン導入→合理的配慮の具体策検討) ○前年度までの支援状況確認・引き継ぎと、本年度運用可能な学校内・外の支援システムの確認と新たな方法の開拓。(低・中学年におけるマーク・ホワイトボード使用による視覚支援の充実) ○支援員配置と近隣大学に呼びかけ、複数の学生ボランティア確保と効果的運用(特に低学年児童に対する手厚い配慮を実現) ○近隣小・中学校・特別支援学校との関係構築を推進。(スクールクラスターの構築を念頭に各校と交流・連絡・調整を行った。) ○保護者の願い・児童の支援ニーズを受け止め、個別の支援計画を作成・運用。
第2ステージ: 「大きく育てよう」 6～9月	<ul style="list-style-type: none"> ○支援の必要な児童を含む誰もが、段階を踏んで主体的に学習に関わる授業デザインを追求し、確かな学力につなげる。(近隣校研修における授業のUD発表、教室のICTによる支援・授業のユニバーサルデザイン化の具体策実現) ○校内OJT研修による、課題克服のための職員の専門性向上と有効な支援策の情報共有。ホワイトボード・付箋等を効果的に使った授業・合理的配慮事例としてのベテラン教諭の教室公開。
第3ステージ: 「花を咲かせよう」 10～1月	<ul style="list-style-type: none"> ○校内外講師招聘・国立特別支援教育研究所研修参加による、新しい支援策の可能性追求。(含む近隣校での研修) ○教育相談による支援策の効果確認と第3ステージにおけるさらなる支援策の構築。 ○ふれあいタイム(学年構成的グループエンカウンター・SSTの定期的実施)と静岡県人間関係プログラムによる集団内での個の在り方の見守りと支援。
第4ステージ: 「実をつけ新しい種を作ろう」 2～3月	<ul style="list-style-type: none"> ○本年度における支援策のまとめと検証を行う。 ○来年度へのより有効な支援策を提案する。 ○小学校6年間を見越した支援の道筋(長期計画)を立案・検討し引き継ぐ。

3 成果

- ・車いす児童・配慮の必要な児童の自立的活動の範囲の拡大を実現し、ユニバーサルデザイン的な授業の在り方・合理的配慮の具体を確立できた。
- ・本校立地の特性を生かし、周辺各校を巻き込んだスクールクラスター(二つの小、中学校・二校種の特別支援学校・特別支援学級設置小学校・通級指導教室・サテライト教室等)整備に向け、研修の場や教諭・児童交流を開始できた。
- ・各教諭・学校職員の専門性向上と環境整備を推進できた。また、スクールカウンセラー・ソーシャルワーカーとの連携の場が増え、効果を確認できた
- ・本校各人材の支援に関わる特性(得意な支援策や授業作り、相談効果、支援学校経験等)を最大限に引き出し、通常の学級の良さ(児童の相互交流・言葉のシャワー等)を反映した、温かくかつ縦横無尽の“支援網”とも言うべき校内体制作りを実現できた。この、支援を求める児童を、担任をはじめ学年を異にする複数の教諭・支援者が見守る体制を構築できたことが、これからの本校における特別支援教育の礎になると考えている。